

いにしへの映画つれづれ ②④ 映画スターとテレビスターの間 千葉豹一郎

今年が放送開始百年ということで、過去の歴史を振り返る企画が目白押しだ。この間の一番大きな出来事は、何といてもテレビ放送の開始だろう。

昭和28年2月1日にNHKが歴史的な放送開始。当初は海のものとも山のものともつかないテレビだったが、たちまち大人気を博した。しかし、これを喜ばなかった人々がいた。他ならぬ映画界である。隆盛を誇っていた映画各社は、この新たに勃興した媒体を警戒し、“電気紙芝居”と揶揄しながらも敵視するようになる。金を払わなければ観られなかったものが、茶の間に居ながらにしてタダで視られるようになるのだから、危機感を抱

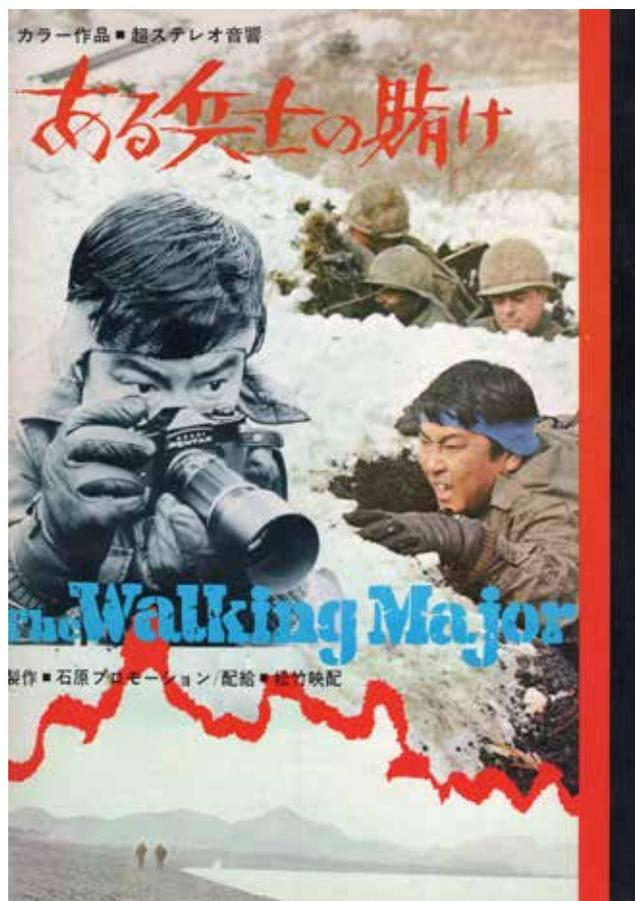
くのも当然だった。前回述べたように、折しも東宝、松竹、大映、東映、新東宝の五社は、制作を再開した日活の俳優や監督らスタッフの引き抜きを防止するための五社協定を締結。各社は同時期に登場したテレビに対し、専属俳優の貸し出し拒否を申し合わせた。そのため、俳優座や文学座などの新劇や歌舞伎、新国劇、ラジオの声優、あるいは発掘した新人などに頼らざるを得ず、新たなスターがテレビから生まれた。こうしたテレビを主にする新顔のスターと従前の映画スターに違いはあるのだろうか？また、両者を区別する意味や必要がはたしてあるのだろうか？

映画界の抵抗にもかかわらず、昭和33年

をピークに映画人口は減少の一途をたどり、同年に放映された傑作ドラマ「マンモスタワー」は、日の出の勢いのテレビ界と落日の映画界との対比を通し映画界の苦悩と未来とを暗示した。衰退する映画界は日活は石原裕次郎のスキー事故による長期入院、赤木圭一郎の交通事故死、松竹も高橋貞二と佐田啓二の交通事故死や名匠小津安二郎の死去、東宝は原節子の引退、大映は巨匠溝口健二の死去や長谷川一夫の映画からの撤退と市川雷蔵の早世など、稼ぎ頭のトップスターの不在という不運が追い打ちをかけた。昭和30年代前半には東映、大映などがテレビへ進出し、「白馬童子」や「少年ジェット」などの番



黒澤明との最後の作品になった「赤ひげ」(65)。黒澤との名コンビで一世を風靡した大スター三船敏郎もテレビに出演するようになって。



石原裕次郎のテレビ出演は、この「ある兵士の賭け」(70)の興行的失敗も一因といわれる。

映画スターとテレビスターの間

組が人気を呼んで他社も続いた。トップクラスのスターもテレビに出演し始め、佐田啓二はその矢先の突然の死だった。長谷川一夫、中村（萬屋）錦之助、大川橋蔵、片岡千恵蔵らも後に続いたが、映画を本編と呼び、〇△テレビ初出演！などと謳って、映画への執着はまだ強かった。しかし、映画会社の専属制も崩壊し、戦後最大の映画スター三船敏郎や石原裕次郎、勝新太郎らも自身のプロダクションを持っていたこともあってシリーズ物に出演するようになり、日本においては映画を主とする映画スターは事実上なくなったも同然だった。「太陽にほえろ！」をはじめとした人気番組でこれら全盛期の映画スターを知ってファンになった若い層も多く、思わぬメリットも大きかった。寅さんシリーズの渥美清、高倉健が映画スターの孤高を守っていたが、渥美は当初はテレビが多く、高倉もわずかながら「あにき」というシリーズ物もあり時折単発のテレビ出演もあって、テレビに出演しなかった映画スターは皆無といえる。このような経緯から日本においては映画スターとテレビスターという区別はあまりなく、両者の確執もほとんどないといってもいいだろう。近年ではテレビ局主導の映画も多く、映画の出身のスターがほぼいなくなった昨今ではなおのことだ。

アメリカでも戦後の1947年に放送の始まったテレビに対し、映画各社は当初から警戒感をあらわにし着々と対抗策を練っていた。1950年代前半から3D立体映画や20世紀フォックスが開発したシネマスコープによる「聖衣」(53)、パラマウントのビスタビジョンによる「ホワイト・クリスマス」(54)などの大型画面による作品を立て続けに世に送り出した。テレビでは絶対に味わえない劇場ならではの画面を活かした趣向で、観客を呼び戻そうという腹だった。とくに「飛び出す映画」と喧伝された立体映画は、それを計算して撮影され、画面から飛んでくる槍を反射的に避けようとした観客

が椅子から転げ落ちたという逸話も残っている。しかし、赤と青の簡易メガネをかける煩わしさも敬遠され、あっという間に廃れてしまった。ビスタビジョンも専用の特殊な映写機を必要とすることがネックとなって普及せず、いずれも大幅な集客にはつながらなかった。一方のテレビは当初の30分枠から1時間枠の番組が増え、内容的にも成長著しかった。映画とは制作費に大差のあることは日本と同様だったが、日本のように映画会社が丸丸となって専属俳優の貸し出しを禁じたというわけではなかった。多くの俳優たちがテレビの将来に懐疑的で、様子見の状態だった。とくに有名スターともなると失敗すればキャリアにも響き、慎重にならざるを得なかった。そのため、初期に台頭したのは新人や映画でパッとしなかった2線級の俳優たちだった。

その中で、日本では草創期にNHKで放送されて大人気を得た「ハイウェイ・パトロール」のプロデリック・クロフォードは、「オール・ザ・キングスメン」(49)でアカデミー主演賞にも輝いたれっきとしたオスカースターだった。ただ、この映画はアメリカの恥部を描いた作品だったため、「紳士協定」(47)などと共に占領下だった日本には未輸入で長く公開されなかった。それゆえ、日本ではクロフォードがオスカースターだということがあまり知られていなかったが、題名より先に Broderick Crawford Starring in と大きく

出て最大級のビリングで扱われ、大物俳優のテレビ出演は驚きをもって受け止められた。もっとも、当のクロフォードはオスカー受賞後も、B級映画の悪役なども演じてあまりこだわりはなかったようで、後年には日本の「人間の証明」(77)にも出演した。当初はシンジケーション番組だった「ハイウェイ・パトロール」が徐々に人気を得て全国で放送されるようになると、地味な存在だったクロフォードは一気に有名人となり風向きが変わってきた。戦前からの人気スターのロバート・ヤングが「パパは何でも知っている」、「地上より永遠に」(53)でアカデミー助演賞を得たドナ・リードが「うちのママは世界一」、フレッド・マクマレーが「パパ大好き」でテレビに進出し、「風と共に散る」(56)でアカデミー助演賞の候補にもなったロバート・スタックも「アンタッチャブル」で大ブレイクして、いずれも活躍の場をテレビに移行していった。放送開始から10年余りを経てテ



初の簡易メガネによる3D立体カラー長編劇映画「ブワナの悪魔」(52)。戦前からの映画スターのロバート・スタックはこの映画を含め主演作も多かったが、「アンタッチャブル」の大ヒットでイメージが固定し他のシリーズも映画もパッとしなかった。

映画スターとテレビスターの間

レビはますます勢いを増して全盛期を迎え、後世に残るヒット番組が次々と生まれた。対して映画界は斜陽の一途をたどり、各撮影所ではテレビ撮影の方が盛んで、大MGMにロバート・ボーン、デビッド・マッカラム主演の「0011 ナポレオン・ソロ」専用のスタジオが出来たりもした。

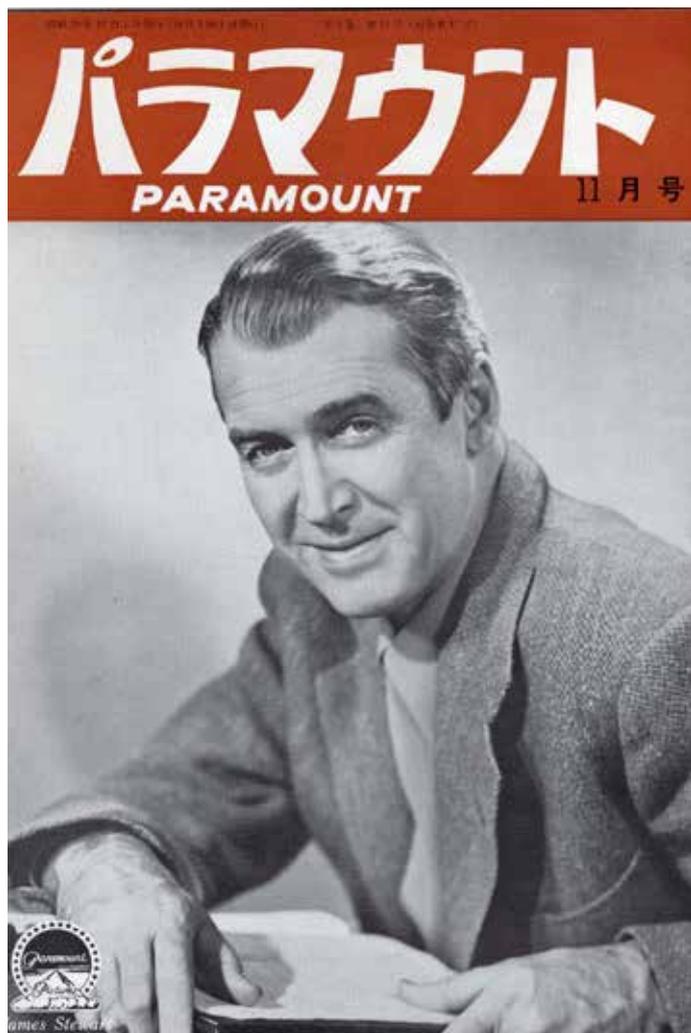
映画雑誌などでも映画の斜陽を伝える記事がよく見られ、往年のスターたちも失業状態に陥った。背に腹は代えられず、1970年前後にかつてのトップスターたちが相次いでテレビシリーズに主演して話題になった。すなわち、ジェームス・スチュワートの「陽気なハーワード一家」、ヘンリー・フォンダの「刑事物語」、グレン・フォードの「保安官サム・ケイド」、アンソニー・クインの「The Man and the City」などである。しかし、揃って不成功に終わり、テレビでは大スター

のご威光がもはや通じないことをまざまざ見せつけた。内容的にはそれほど悪くはなかったものの、彼らを引っ張り出した意味が見いだせず、大スターの昔の名前に寄りかかった安易な企画だったことは否めなかった。年齢的にも盛りを過ぎていたことも災いしたといえよう。フォンダは1950年代末の「胸に輝く銀の星」も、主演と謳いながら出番の少ないことに詐欺だという非難もあって長続きしなかった。舞台人との自覚が強いフォンダは意に介さなかったようだが、クインの失望と落胆は大きかった。上記の中で「The Man and the City」のみが日本未放映で、パイロット版が「灰色のハイウェイ」のタイトルで深夜の映画枠で放送された。それを視た限りではおもしろくはなく、裏番組の探偵物「マニックス」やアンソロジーのミステリー「ナイト・ギャラリー」に抑え込ま

れ、シーズン途中のわずか15本で打ち切れ一番短命だった。

そこへ「マニックス」の主演者マイク・コナーズが、日頃テレビスターを見下しているのに何たる様だ！いい気味だ、とこき下ろしたからたまらない。これにクインが猛反撃して、泥仕合となった。ほめられた”論争”ではないが、たしかにそういう偏見はあったようにいみじくも両者の関係を象徴しているともいえた。「刑事マディガン」(68)や「ダーティハリー」(71)で知られるベテランのハリイ・ガーディノも、「テレビの仕事をやっているとバカバカしくて酒の量が増えて困る」と発言し物議をかもしたことがあった。

コナーズはB級映画を経て囃捜査官を好演した「タイトロープ」で人気急騰し、映画に返り咲いた。ジャック・レモンの「ちょっとご主人貸して」(64)やスーザン・ヘイワー



大スターのジェームス・スチュワートも、テレビでは神通力が発揮できなかった



「必殺の一弾」(56)などで50年代の人気スターだったグレン・フォードは、60年代に入るとアルコール依存症も進んで低迷。テレビも失敗し、引退同然になりながらも90歳の長寿を全うした。

映画スターとテレビスターの間

ドの「愛いずこ」(64)、名作「駅馬車」(39)のカラー・リメイク版 (66)などに出演したが成功せず、67年スタートの「マニックス」で再び人気者となっていた。もっとも、テレビの人気者たちも映画に比べて制作費もギャラも格段に低く、拘束時間も長いうえにスケジュールも過酷なテレビより、映画へ行きたいというのが本音だった。毎回同じような展開のテレビは俳優としてもやりがい不足、人気番組であればあるほどイメージが固定するという宿命も背負って多くはうまく転身できなかった。「スーパーマン」のジョージ・リーブスの自殺（「ハリウッドランド」(06)で描かれたように事故、他殺説もある）は極端にしても、「ベン・ケーシー」のピンセント・エドワーズ、「逃亡者」のデビッド・ジャンセン、「サンセット77」のエド・バーンズなど、数え上げれば切りがない。映画への凱旋に成功したのは、「シカゴ特捜隊M」のリー・マービン、「拳銃無宿」のステイブ・マックイーン、「ローハイド」のクリント・イーストウッド、「カメラマン・コバック」のチャールズ・ブロンソンくらいで、マービンは「キャット・バレー」

ワーナー最後の専属となって消えてしまった。だが、ブラウン管では生き生きと動き回っていた面々も映画では精彩を欠いて主要な役ではないことも多く、日本よりいろいろな面で映画とテレビの格差の大きいことが、両者の反目の原因となってそれが前述のような偏見につながったようだ。ただ、映画とテレビとではファン層がまったく違い、日本の外画ドラマ全盛期に創刊された「テレビジョンエイジ」(後に休刊)と「映画の友」や「スクリーン」などとは、驚くほど被る部分がなかった。両者の棲み分けができていて、ということで、むしろ、劇場でたまに観るスターより、毎週お目にかかるテレビスターにより親しみを感じる人も多かったようだ。映画スターとして将来を嘱望されながら人気急降下し、テレビの「特攻野郎 Aチーム」で見事復活したジョージ・ペパード、近年では「ER」から映画のトップスターとなったジョージ・クルーニーのような例もあり、テレビのギャラもかなり高騰している。以上のことから、強いて映画スターとテレビスター

を分ける必要も意味もまったくないといえるだろう。舞台俳優を一番上に見るのは日本も諸外国も共通しており、テレビで人気を得たスターが舞台俳優であることも珍しくないのだからなおさらだ。かつて、新劇界の大御所だった芥川比呂志（芥川龍之介の長男）もバリバリのアクション物の「ゴールドアイ」というドラマにレギュラー出演して世間をあっと言わせたが、「ハムレット」などの文芸物でもアクションの場面があったりするのだから、両者を区別する必要はまったくないとインタビューで断言している（このシリーズは大人気ドラマ「ザ・ガードマン」と後半部分がかち合ったため短命に終わったが）。あえてジャンル分けして、さまざまな面で格差をつけようとする無意味さを戒めたと取れる。もし映画スターとテレビスターに差異があるとすれば、あくまで各自の資質や力量の問題で、演技の広がりが少ないテレビスターが不利なのは致し方ないだろう。もっとも、映画偏重の姿勢は根強く、映画評論家は数あれど、テレビも手がける評論家はごくわずかだ。そのため、テレビに関する論評や研究、歴史などが映画に比べて手薄になっているのは好ましくない状況だ。勃興したのは映画が先とはいえ、同じ映像なのだから無用なライバル心など持たずに共存するのが正しい方向ではないか、と強く思うのだが・・・。

は「キャット・バレー」(65)でアカデミー主演賞まで得た。コナーズその他、「ペリー・メイスン」「鬼警部アイアンサイド」のレイモンド・パー、「サンセット77」「FBI アメリカ連邦警察」のエフREM・ジンバリスト・ジュニアのように、複数の人気シリーズでテレビテレビ界に確固たる地位を築いた面々もいる一方、ほぼ一本で消えてしまった一発屋も珍しくない。映画を主に「サーフサイド6」との両輪だったトロイ・ドナヒューも、三日天下で



昭和30年代の備忘録 for iPhone
千葉豹一郎

あの日、未来は明るかった——。
慌ただしくもほっと、現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

大田区大森を中心に、高度成長期の東京がいきいきと見えます。

ケーシー先生や力道山に憧れ、アトムや鉄人にも熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっばいの少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の銘柄の馬肉100%コンビーフや怪しい選けないアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。“古き良き昭和”ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。

付録ムービー

テレビ・芸能

1. テレビの青春時代
2. 教科書だったアメリカのドラマ
3. フロリスとカネシマ
4. 実写版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」
5. コマソンの女王 楠トシエ

家電

6. 電氣屋の憂うつ
7. カラーテレビ狂想曲
8. リモコンテレビが欲しい!
9. クーラーをつけたまま寝ると死ぬ?
10. ホラロイドカメラ
11. 可愛いワジペットカメラ
12. 8ミリフィルム

食

13. モナカカレーと「少年ゾエト」
14. アメリカンドック車始めのレモネード
15. ハンバーガー一筋伝
16. スイッチは何かを指す?
17. 謎のフトルミン
18. 駄菓子屋とお菓子屋のあったころ
19. 箱末ジュース盛衰記
20. 傑作! 噴水型ジュース自動機
21. 10円アイスクリームが花盛り
22. 消えたガムついでに

ホビー

23. 鉄の手裏剣
24. 2B弾とクラッカー
25. 姫玉鉄砲の王道

26. 輝くマテル
27. 黒かった金剛銃のモデルガン
28. プラモデル熱中時代

社会・文化

29. 「ネネ」の時代
30. 外車愛護記
31. 国産車は酷使せ!
32. サンドイッチのような車の三両窓
33. ティーバックはフンダランド!
34. 旬の映画館
35. 新ひたすた式コップ
36. 月刊マンガ雑誌と付録
37. ベラベラのソノシート

* 本書 DVD 版は、月刊 FDI 編集部にて *
本文：108 ページ / 映像：2 分 23 秒 2012 年 9 月 ミリアムワード(株) 発行
価格：1,980 円 (税込)
株式会社ユニワールド 東京都世田谷区上北沢3-17-5 杉本ビル1F

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。